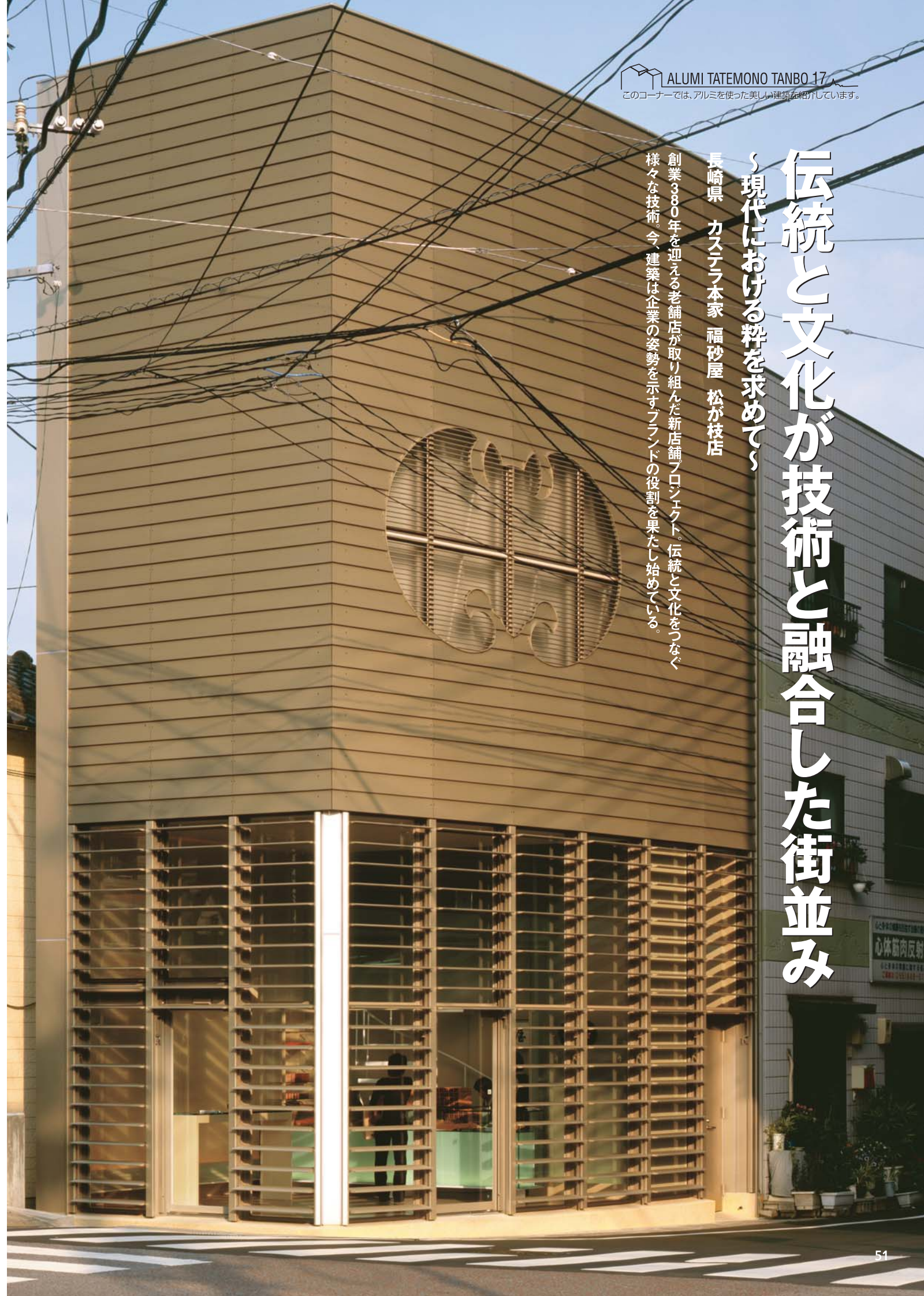


伝統と文化が技術と融合した街並み

現代における粹を求めて

長崎県 カステラ本家 福砂屋 松が枝店

創業380年を迎える老舗店が取り組んだ新店舗プロジェクト。伝統と文化をつなぐ様々な技術。今、建築は企業の姿勢を示すブランドの役割を果たし始めている。



「ゼロからつくりだし、再びゼロへ戻す、すなわち次の人が新しい形で「から使えるように戻すこと、それが『環境』のあるべき姿だと思っております。九州を中心に数多くの物件を手掛け、近年ではアジアでも幅広い活躍を続ける中村亨一氏は、自邸の外壁材に使用したアルミのサイディング型材にこう話し始めた。

現在、建材としてのアルミを語る上で欠かせない代名詞それが環境というキーワードだ。3R(リデュース・リユース・リサイクル)という言葉も浸透してきた今日、どれだけの3Rが建築業界の中で実際に行なわれているのだろうか。

中村氏の目にとまった建材、それがアルミだった。

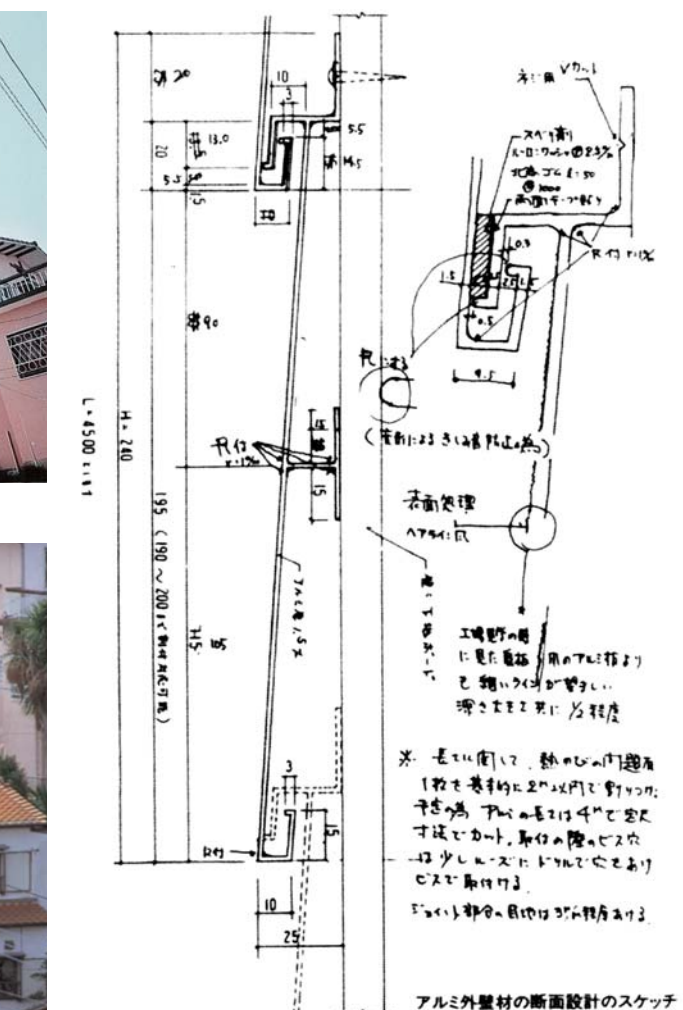
「建築の中ではサッシ以外、敬遠されがちだったアルミについて色々調べてみました。確かに精錬過程では膨大な電気を必要としますが、耐久性が高い金属なので一旦製品になれば再生して何度でも使えます。しかも再生時に必要とされるエネルギーは精錬時の3%とローコストに転じるのも合理的です。そして何と言っても押出という技術に、多くの可能性を組み合わせることが出来る点に魅力を感じたのです」。

中村氏は自邸プロジェクトの中で、アルミ押出によるオリジナルの型材を作成している。①軽くて持ち運びが簡単 ②専門職ではなく大工でも取付工事が可能 ③ビスで取付できる ④下地を選ばない ⑤開口部の処理が現場で可能 ⑥回収が可能であり、転用して使うこともできる…。数多くの条件を満たすことが出来るアルミに、環境と言う側面からだけでなく、素材として大きなメリットを感じたと語っている。

「実はこの時に使用した型材が、今回ご紹介する「福砂屋松が枝店」の外壁に用いられているのです」。

建物に求められた役割

日本に現存する最古の教会堂で国宝にも指定されている「大浦天主堂」。文久3年(1863年)に建てられた日本で最も古い木造洋風建築「グラバ



撮影:山本シンセイ

環境問題の根底にあるもの

「この自邸プロジェクトは、現代に生きる私たちにとって快適な環境とは何か、生活とは何か...という問いを、建築物の原点ともいえる住宅で考え、検証しようとしたものです。近年における建築は、消費されていく巨大な箱と化していました。廃棄物を垂れ流し、コスト優先のものづくりが行なわれ、再生産や再利用は非近代的なものと思われ、無視され続けられました。しかし地球温暖化が叫ばれ、環境問題が矢面に立たされている今、これからの建築は本気で再生産・再利用を見据えて考えなければいけないのではないかと思ひ始めたからなのです」。

多方面から様々な情報を取寄せた





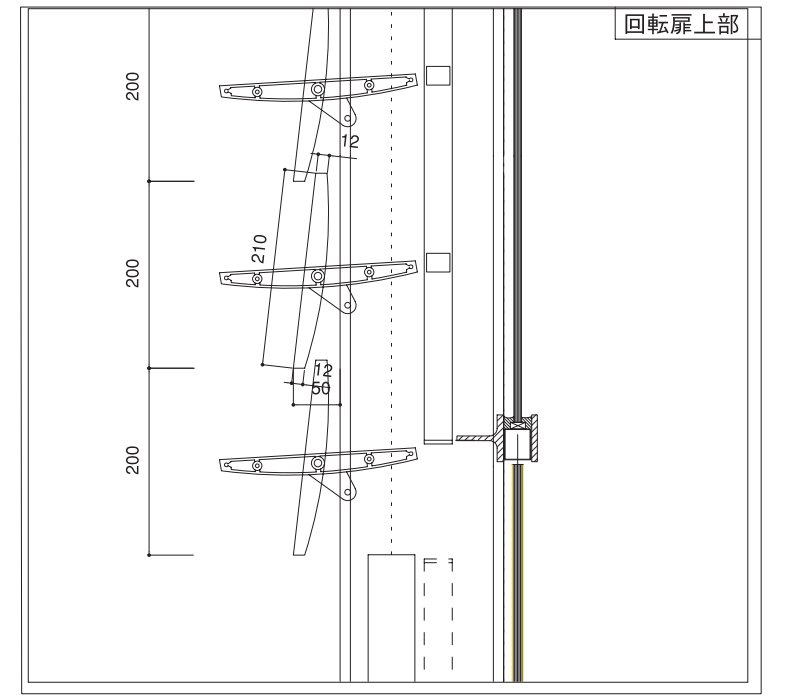
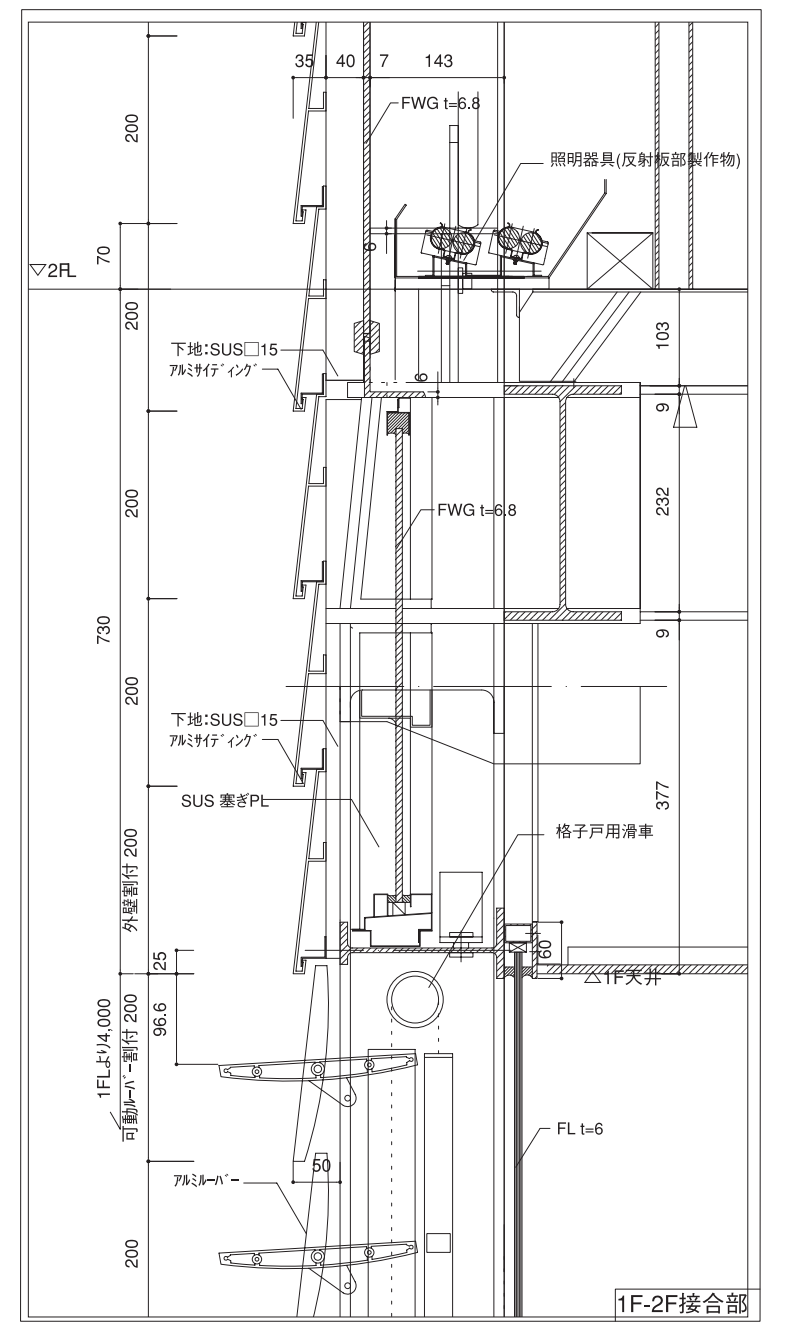
「一郎」。かつては異文化交流の地として、現在は長崎きつての観光スポットとして日々賑わう街並みにおいて、ひとときを輝き、異彩を放つ建物、それが「福砂屋松が枝店」だ。クライアントは創業寛永元年（1624年）、380有余年もの伝統を誇るカステラの老舗「福砂屋」。創業より一貫して伝統の味を守りつづけ、熟練職人による「手わざ」で仕上げるこだわりの製法で、全国に幅広いファンを持つ名店である。

「福砂屋さんのお付き合いは長く、これまでにも数多くの店舗を手掛けさせて頂きました。福砂屋のブランドを担う殿村常務から新店舗出店の相談を受け、出店地の選定から関わらせて頂いています。計画地での店舗の存在意義などについて伺いし、多方向から分析し、福砂屋松が枝店の姿を模索した結果がこの形だったので。」

「街並み保存地区である東山手洋館群と南山手洋館群、そして長崎アーバンルネサンス構想地域に挟まれ

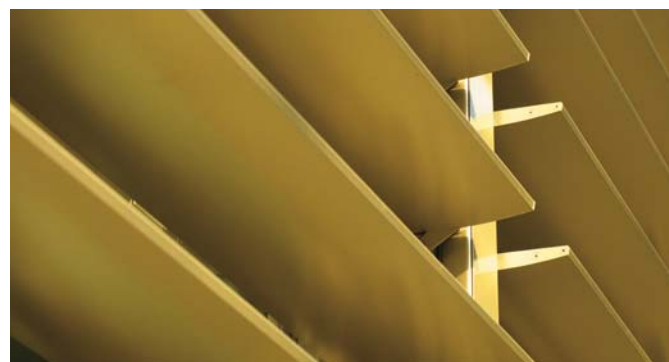
ながら、未整備であったこの場所に新店舗を構えること決めた時点から、建物に求められる役割は決まっています。地域の活性化を図る起爆剤、すなわちランドマークという使命がこの建物には課せられていたのです。そのためには長崎の歴史と共に歩み、文化を継承する企業「福砂屋」として、オリジナリティー溢れるものづくりが必要だと考えました。大浦天主堂もクラブ

「一郎」も建てられた当時は、おそらく非常に斬新なものであったと思います。しかしこの街は、それらを受け入れ、文化として育んできました。ですから、二十世紀の福砂屋を表現できる建材として、アルミを用いるという案は非常に面白く感じました。『あれは一体、何だろう…』と、道行く人が思わず足を止めて見上げてしまうような建物。『面白そう、入ってみたい』と思わせることができる強いインパクトが、この場所には必要だったので。」





撮影:P51. 54. 55. 56 (顔写真を除く) 浅川 敏



「ここは一般の観光客だけでなく、全国各地から修学旅行の学生が集う場所。福砂屋を知らないこの世代こそ、今後開拓していかねければいけない大事な顧客層なのだ」と殿村常務は語る。

「今の時代、建築は企業のあり方を体現するブランドそのものなのです。ですから、この建物には私たち福砂屋の『本物』に対するこだわりが凝縮されているのです」。

ルーバーがもたらす様々な効果

この建物の設計にもう一人、深く関わっている人物がいる。インテリアデザイナーの藤江和子氏だ。全体のイメージづくりからファサードデザインなど、初期段階から殿村常務、中村氏、照明デザイナーの面出薫氏と共に計画に参加してきた。

「創業380年の福砂屋という企業の歴史と伝統を、未来に向けてどう表現するか。この課題に対して、アルミやガラスといった現代の素材を使いながら、建築とインテリアが一体となった店舗スタイルを共に思考し提案しました。ルーバーの使用は西日の影響を受ける場所だったため、太陽光のコントロールが重要だと考えたことがきっかけです。色々と検討した結果、ルーバーのピッチは200mmに設定しました。程よい開口は店内を美しく見せ、内外からの視線を制御し、しかも西日を奥まで差し込ませないというメリットをもたらしています」。

ルーバーには曲面を持たせているため、太陽の光を受けた建物の表情が、日々変わると言った日本特有の情緒ある繊細な表現を可能にしているのです」。

伝統と技術が生み出す独創美

「いいものをつくりたい」という福砂屋のこだわりを理解した上で臨んでくれる職人さんと一緒に仕事をしたい...という殿村常務の考えのもと、CM方式によって施工は進められていった。前出の如く、福砂屋の外壁上部には中村氏自邸と同じ型材が用いられている。

「自邸で使用した型材のディテールをベースに、バージョンアップさせたものを使いました。自邸もCM方式で施工を行ったため、型材の発注や平米あたりの作業単価についてなど、細部に渡ってノウハウが蓄積されており、福砂屋のCM方式では大いに役立ったと感じています」と中村氏。自身の事務所内にCM組織を設置し、専任者および業者とプロジェクト契約を交わしたという。

「可動するアルミルーバーは、型材のデザインはもちろん、可動オペレーションシステムからビスの設計まで行い、金属業者に直接発注しました。暖簾や看板を出さない代わりに、福砂屋の商標である蝙蝠(こうもり)マークを建築に一体化させています。外壁はグリーンがかったゴールドに塗装しました。これも現地何度か太陽光の下での見え方をシミュレーションして



決定しました。職人ならではの技術を用いて、リサイクルガラスを混入した人低テラゾーも採用しています。最新技術を融合させたオリジナルリテイク溢れるプロダクトの集合体、それがこの福砂屋松が枝店なのだと思います」。

安価で且つ短期間で建て替えることを前提とした寿命の短い建築が乱立する現代において、細部にまでこだわり抜いてつくられた福砂屋のような建物は少なくなっている。

「昔は『旦那衆』と呼ばれる殿村常務のような人がいて、棟梁や職人にそれぞれテーマを与えて、独自の感性で建物をつくっていたんですよ。それが『粋』であり、日本独自の美意識を育んできたものでした。福砂屋が考える『粋』を、今という時代を映すアルミ素材で個性豊かに表現できたことは、非常に有意義な経験でした。環境という側面と同時に、多彩な表現が可能なアルミの新たな使用方法を、今後も探求しつづけていきたいと思っています」。



中村 亨一 (なかむらきょういち)
 1951年 長崎市生まれ
 1982年 中村建築設計室 設立
 1996-99年 国際建築家連合 (UIA) AOF委員
 1998-02年 九州産業大学非常勤講師
 2001-02年 九州工業大学非常勤講師
 JCD優秀賞 グッドデザイン賞 JIA環境建築賞 等受賞
 現在 日本建築家協会 環境行動委員